

Program

J.S.バッハ：フーガの技法 BWV1080 コントラ punctus 1～4

J.S. Bach: *Die Kunst der Fuge BWV1080 ~ Contrapunctus 1-4*

ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 Op.110

D. Shostakovich: *String Quartet No.8 in C minor Op.110*

第1楽章：ラルゴ	1 st Mov.: Largo
第2楽章：アレグロ・モルト	2 nd Mov.: Allegro molto
第3楽章：アレグレット	3 rd Mov.: Allegretto
第4楽章：ラルゴ	4 th Mov.: Largo
第5楽章：ラルゴ	5 th Mov.: Largo

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 Op.130／大フーガ Op.133

L.v. Beethoven: *String Quartet No.13 in B flat major Op.130, Grosse Fuge Op.133*

第1楽章：アダージョ・マ・ノン・トロッポー・アレグロ	1 st Mov.: Adagio, ma non troppo – Allegro
第2楽章：プレスト	2 nd Mov.: Presto
第3楽章：アンダンテ・コン・モート・マ・ノン・トロッポ	3 rd Mov.: Andante con moto, ma non troppo
第4楽章：アラ・ダンツァ・テデスカ、アレグロ・アッサイ	4 th Mov.: Alla danza tedesca. Allegro assai
第5楽章：カヴァティーナ、アダージョ・モルト・エスプレッシーヴォ	5 th Mov.: Cavatina. Adagio molto espressivo
第6楽章：大フーガ、アレグロ	6 th Mov.: Great fugue. Allegro

Program Notes

柴田 克彦(音楽評論家)

Katsuhiko Shibata

本日披露されるのは、シリアルな点において各時代の最右翼に位置する作曲家の作品が並んだ、意味深いプログラム。この夏、ヴァイオリンのライナー・シュミット(プライベートで来日中)に話を聞いたとき、彼はこう語った。

「ここには2つの結び付きがあります。1つはバッハとベートーヴェン。2人はフーガと関わりの深い作曲家で、今回の作品にもそれが登場します。もう1つはバッハとショスタコーヴィチ。2人は自身の名『B-A-C-H』と『D-S-C-H』を音名象徴として用い(今回は演奏されないが、バッハは『フーガの技法』の未完のフーガでこれを採用)、さらには今回の2曲を4音で始めています。そしてショスタコーヴィチの第1楽章もほとんどフーガのように書かれています。ですからこのプログラムは、3つの異なる時代の作曲家がそれぞれの思いでフーガを扱っている点が妙味です」。

さて、熟成のクアルテットが聴かせる対位法の妙やいかに?

J.S.バッハ:フーガの技法 BWV1080 コントラ punctus 1～4

「フーガの技法」は、ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685–1750)が晩年に残した、単一主題によるフーガの集成。1740～49年に書かれたと推定され、BWV(バッハ作品目録)に19曲掲載されてはいるものの、曲数、配列、使用楽器など、いまだに議論が尽きない作品だ。

同曲では、二短調のシンプルな主題に基づいて、様々な対位法の可能性が追求されている。今回はその内、最初に置かれた4曲が演奏される。全曲の中で「単純フーガ」に分類される、基本的な4声フーガの部分である。「他の部分を演奏しても、結局ここに戻ってきます。皆様にバッハのアイデアをお伝えするには十分だと思います」(シュミット)。

「コントラ punctus」は「対位法による曲」といった意味。「1」は基本主題による標準的なフーガ。「2」はそこにリズム変化が加えられ、「3」は主題が転回される。「4」は異なる転回がなされ、転調による変化も加わる。

ショスタコーヴィチ:弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 Op.110

旧ソ連最大の作曲家ドミトリ・ショスタコーヴィチ(1906–75)が残した15曲の弦楽四重奏曲は、質量共にベートーヴェン以来の偉業と称されている。第8番はその中でも代表的な作品。指揮者バルシャイ編の室内交響曲版でも知られている。

1960年、戦争関連の体制映画「五日五晩」の音楽を書くために訪問中のドレスデンで作曲された本作は、その際に受けた心痛から「戦争とファシズムの犠牲者の思い出に捧げられた」(スコアに記載)と解釈された。しかし自身のイニシャル「D-S(E b)-C-H=レ・ミ b -ド・シ」音型を中心主題とする上に、10曲にも及ぶ自作&他作を引用した内容は自伝的な要素が強く、今では「共産党入党が決まって苦悩する自身への

レクイエム」との見方が有力視されている。

曲は、全く切れ目のない5楽章構成で、全楽章が短調を基調としている。「バッハから200年飛びながら、同様のテンポと似た動きで始まります。ですから聴いている方は『バッハが続くのか』と感じるでしょう。それが突然、全く違う方向に展開していく。これはとても効果的だと思います」(シュミット)。

第1楽章：ラルゴ、ハ短調。D-S-C-H主題で始まる悲痛なフーガ。

第2楽章：アレグロ・モルト、要短調。スケルツォ的な激しい楽章。終盤にピアノ三重奏曲第2番の主題が登場。

第3楽章：アレグレット、ト短調。哀愁を帯びたワルツ。中間部にチェロ協奏曲第1番の主題が現れる。

第4楽章：ラルゴ、ハ短調。激烈な強奏和音が反復され、歌劇「ムツエンスク郡のマクベス夫人」のアリアほか、引用の断片が多数登場。

第5楽章：ラルゴ、ハ短調。D-S-C-H主題中心の静謐な終曲。ここもフーガが展開される。

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 Op.130／大フーガ Op.133

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770–1827)は、第11番「セリオーソ」を1810年前後に完成後、弦楽四重奏曲から遠ざかっていた。だが、「ミサ・ソレムニス」「第九」の両大作を作曲中の1822年末、ロシアの貴族ガリツィン侯爵から依頼を受けて、1824年に創作を再開。これを機に、後期の深淵な5曲=第12番～第16番が誕生した。

1825年作の第13番は、ガリツィン侯の依頼で書かれた第12番と第15番を含む3曲中、最後の作品(番号は出版順)。これら3曲は、順に4楽章、5楽章と楽章数が増え、本作は6楽章の組曲風の構成となっている(シュミットは「各楽章のコントラストがどんどん強まり、次の楽章で予測せぬことが必ず起きる作品」と語る)。最初は終楽章に重く厳しい巨大フーガを置く形で完成されたが、晦渋過ぎると批判されたベートーヴェンは、1826年に明るく軽快な楽章を作曲して差し替え、元々の終楽章は「大フーガ」として別途出版された。

だが今回は、「大フーガ」を終楽章に置いた、当初の形で演奏される。「私たちは、『大フーガ』が5つの楽章の後に来るべきであり、その方が新たな楽章を置くよりも強い意味を持つと思っています。それに第5楽章のカヴァティーナがフーガの導入役を果たしており、この導入なしにフーガが来ることはないと」(シュミット)。

第1楽章：アダージョ・マ・ノン・トロッポー・アレグロ、変ロ長調。自由な幻想曲風の音楽。

第2楽章：プレスト、変ロ短調。ぐく短い間奏曲風の快速楽章。

第3楽章：アンダンテ・コン・モート・マ・ノン・トロッポ(いくらかスケルツォ風に)、変ニ長調。

ここも幻想曲風の諧謔的な音楽。

第4楽章：アラ・ダンツァ・テデスカ(ドイツ舞曲風に)、アレグロ・アッサイ、ト長調。素朴なレントラー舞曲。

第5楽章：カヴァティーナ、アダージョ・モルト・エスプレッシーヴォ、変ホ長調。有名な美しい楽章。

ベートーヴェン自身「自作の中で、これほど自分を感動させた作品はない」と語ったという。

第6楽章：大フーガ、アレグロ、変ロ長調。741小節の長大な楽章。序奏と5部分のフーガ、コーダで構成され、精緻かつ異なる迫力をもった音楽が展開される。